



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

教学マネジメント 取組事例集

令和8年3月

文部科学省高等教育局大学振興課

目次

1 はじめに

2 本取組事例集の構成

3 本取組事例集で掲載している大学の基本情報

4 茨城大学 ～スチューデントサクセス「なりたい自分になる」を支える教学マネジメント体制の確立～

5 愛媛大学 ～全学と学部等との密接な連携体制構築による教学マネジメントの加速～

6 金沢大学 ～学長のリーダーシップによる抜本的な教育改革と教育・学修環境のDXによる「自ら学び、自ら育む」教育環境の構築～

7 佐賀大学 ～入学から卒業までのあらゆる教学データを可視化し学生の成長実感と教育改善に繋げる取組～

8 新潟大学 ～分野横断型の学びを可能にする教学マネジメント～

9 コラム①：国際教養大学 ～学生の成長を促す厳格な成績評価～

10 京都芸術大学 ～芸術分野における学修成果の可視化と学生参画型の教学マネジメントの確立～

11 芝浦工業大学 ～データドリブンな教学マネジメントの確立～

12 東京都市大学 ～学生の成長実感を高める大学独自のPBLの実践と多角的な成績評価による学修成果の可視化～

13 コラム②：立命館大学 ～学修支援における大学独自の生成AI(Ritsumeikan AI)の活用～

14 サイバー大学 ～通信制大学における教育の質向上・質保証のための取組 -マイクロクレデンシャル導入、データ利活用、手厚い学修支援を中心に～

1 はじめに

本取組事例集の作成にあたって

学生が可能性の伸長を実感できる大学教育の実現につながる「教学マネジメント」を推進するために、何が必要か。

「教学マネジメント指針」（令和2年）の策定から5年目の節目に、取組の実態を追う中で見えてきたのは、
大学が「データに基づく学修成果の可視化」を「教職協働の全学的な組織体制」の下で行い、
たゆまぬ教育改善に取り組んだ結果、「学生が大学教育を通じて成長実感を得られている」という確かな手ごたえ
でした。

なぜ「データに基づく学修成果の可視化」か。これには二つの意義があります。

一つは「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」で示された学修目標の達成状況を可視化することで、
学生自身が大学での学修成果を、揺るぎないエビデンスをもって自らの言葉で表現できるようになること。
もう一つは、大学全体が一丸となって、更なる教育改善に向けた大きな一歩を踏み出すための起爆剤になること。

ヒアリングを行った11の国公立大学からは、「データに基づく学修成果の可視化」を通じて、試行錯誤を重ねながら
学生自身が自らの成長を実感できる学修環境を実現し、その学生の伸長が大学にも伝わり、全学的な教育改善
への歩みを一層躍動させるといった、「魂のこもった教学マネジメント」を垣間見ることができました。

ご協力いただいた大学関係者の皆様にこの場を借りて感謝を申し上げますとともに、本取組事例集が多くの大学に
おける教育改善に活用され、学生が自らの可能性の伸長を最大限実感できる高等教育改革の推進に寄与
できることを強く期待しています。

1 はじめに

本取組事例集に掲載する大学や取組内容の選定基準について

- 本取組事例集の作成にあたり、文部科学省が令和6年度に実施した「**令和5年度の大学における教育内容等の改革状況について**」(※)の結果を元に、**教学マネジメントに関する下記Ⅰ～Ⅴの取組が全体的に行われている大学**を抽出しました。

「令和5年度の大学における教育内容等の改革状況について」調査項目例

Ⅰ：「三つの方針」を通じた学修目標の具体化

- ✓ 三つの方針の達成状況を全学的に**点検・評価している**
- ✓ 三つの方針に基づく教育の成果を点検・評価するための、学位を与える課程共通の考え方や尺度を**策定している**

Ⅱ：授業科目・教育課程の編成・実施

- ✓ 全学的な方針の下、科目の役割を教員間で共有し、他科目と関連付けて、**全ての学部・研究科で組織的な教育を展開している**
- ✓ 1年間または1学期間に履修科目登録ができる単位数について、**学部の全部または学部の一部で上限を設定している**

Ⅲ：学修成果・教育成果の把握・可視化

- ✓ 学生の学修成果の把握を**行っている**
- ✓ ディプロマサブリメントなど、学生が修得した知識や能力等を明らかにするための資料を、**交付している**

Ⅳ：教学マネジメントを支える基盤(FD・SDの高度化、教学IR体制の確立)

- ✓ 大学全体の専任教員のうち、昨年度FDに参加した者のおおよその割合が、**全員または4分の3以上である**
- ✓ 大学内に、全学的な組織として**IRを専門で担当する部署を設けている**

Ⅴ：情報公表

- ✓ 教学マネジメントに関し、昨年度公表を行ったものについて、**以下のいずれかを公表している**
 - 学位の授与状況、卒業生の進学率、卒業生の就職率、学生の学修時間、大学の教育研究活動に関する学生の満足度 等

- 上記で抽出された大学に対して、**個々の取組がどのように機能し、全学的な教学マネジメントが確立されているか**について、**アンケート調査やインタビュー調査**を通じて聞き取りを行いました。
- 教学マネジメントを確立する上での課題は、大学の設置者(国公私)、規模、地域、授業の方法(通学制・通信制)等によって様々であるため、掲載事例の精選にあたっては、**あらゆる属性の大学の取組事例を収集**することについても留意し、有識者の意見も踏まえながら掲載事例を精選しています。

※ 文部科学省「令和5年度の大学における教育内容等の改革状況について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00013.htm

2 本取組事例集の構成

- 本取組事例は、①全学的な教学マネジメント体制の概要、②個別の取組の具体的内容の2ページ構成です。(コラムを除く)
- コラムでは、②個別の取組に焦点を当て、特徴的な取組事例を掲載しています。
- ②個別の取組について、本取組事例集では以下の表のとおりA～Fのテーマを掲げ、テーマに関連した当該大学の特徴的な取組をまとめています。各大学で取組事例として掲載しているテーマは以下の表の「○」の通りです。

設置者	大学名	テーマ名						掲載ページ
		A：学生に対する厳格な成績評価や卒業認定の実施	B：成績優秀者への称号授与等を含む学生自らの学修成果を社会に対して示す取組	C：アカデミック・アドバイジング等の学修支援体制の整備	D：大学間連携を通じた教学マネジメントを支える基盤の確立	E：教学マネジメントにおける生成AIの活用	F：在学中の学生の伸びを可視化する取組	
国立	茨城大学	○					○	p.6-7
	愛媛大学			○	○			p.8-9
	金沢大学	○		○				p.10-11
	佐賀大学		○				○	p.12-13
	新潟大学			○		○		p.14-15
公立	国際教養大学	○(コラム)						p.16
私立	京都芸術大学	○		○				p.17-18
	芝浦工業大学	○					○	p.19-20
	東京都市大学						○	p.21-22
	立命館大学					○(コラム)		p.23
	サイバー大学		○	○				p.24-25

3 本取組事例集で掲載している大学の基本情報

大学名	設置者	設立年	所在地	設置学部	学生数
茨城大学	国立	1949(昭和24)年	水戸キャンパス(茨城県水戸市) 日立キャンパス(茨城県日立市) 阿見キャンパス(茨城県阿見町)	人文社会科学部、教育学部、理学部、工学部、農学部、地域未来共創学環	6,782名 (留学生は100名)
愛媛大学	国立	1949(昭和24)年	城北キャンパス(愛媛県松山市) 重信キャンパス(愛媛県東温市) 樽味キャンパス(愛媛県松山市)	法文学部、教育学部、社会共創学部、理学部、医学部、工学部、農学部	8,109名 (留学生は29名)
金沢大学	国立	1949(昭和24)年	角間キャンパス(石川県金沢市) 宝町・鶴間キャンパス(石川県金沢市)	融合学域、人間社会学域、理工学域、医薬保健学域	8,216名 (留学生は46名)
佐賀大学	国立	1949(昭和24)年	本庄・鍋島キャンパス(佐賀県佐賀市) 有田キャンパス(佐賀県西松浦郡有田町)	教育学部、芸術地域デザイン学部、経済学部、医学部、理工学部、農学部	5,787名 (留学生は22名)
新潟大学	国立	1949(昭和24)年	五十嵐キャンパス(新潟県新潟市) 旭町キャンパス(新潟県新潟市)	人文学部、教育学部、法学部、経済科学部、理学部、医学部、歯学部、工学部、農学部、創生学部	9,972名 (留学生は40名)
国際教養大学	公立	2004(平成16)年	国際教養大学キャンパス(秋田県秋田市)	国際教養学部	859名 (留学生は約160名)
京都芸術大学	私立	1991(平成3)年	瓜生山キャンパス(京都府京都市) 外苑キャンパス(東京都港区) 大阪サテライトキャンパス(大阪府大阪市)	芸術学部、通信教育部芸術学部	22,230名 (留学生は554名)
芝浦工業大学	私立	1927(昭和2)年	豊洲キャンパス(東京都江東区) 大宮キャンパス(埼玉県さいたま市)	工学部、システム理工学部、デザイン工学部、建築学部	7,939名 (留学生は198名)
東京都市大学	私立	1929(昭和4)年	世田谷キャンパス(東京都世田谷区) 横浜キャンパス(神奈川県横浜市)	理工学部、建築都市デザイン学部、情報工学部、環境学部、メディア情報学部、デザイン・データ科学部、都市生活学部、人間科学部	7,506名 (留学生は101名)
立命館大学	私立	1922(大正11)年	衣笠キャンパス(京都府京都市) びわこ・くさつキャンパス(滋賀県草津市) 大阪いばらきキャンパス(大阪府茨木市) 朱雀キャンパス(京都府京都市)	法学部、産業社会学部、国際関係学部、文学部、経済学部、スポーツ健康科学部、食マネジメント学部、理工学部、生命科学部、薬学部、経営学部、政策科学部、総合心理学部、グローバル教養学部、映像学部、情報理工学部	34,884名 (留学生は1,871名)
サイバー大学	私立	2007(平成19)年	福岡キャンパス(福岡県福岡市)	IT総合学部	3,726名 (海外からも受講可能な通信制大学のため、留学生としての受け入れは0名)

4 取組事例(国立)：茨城大学

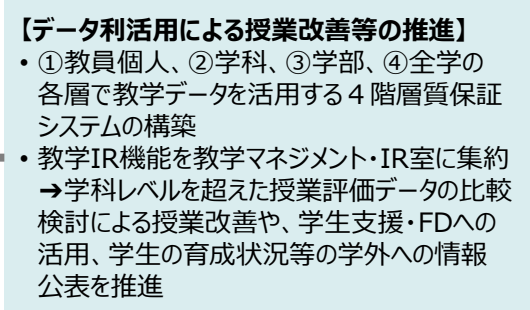
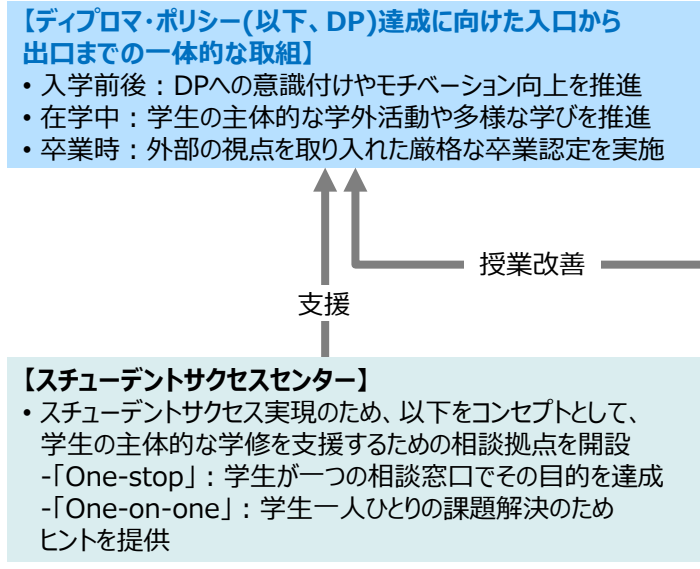
～スチューデントサクセス「なりたい自分になる」を支える教学マネジメント体制の確立～

① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 平成28年度大学教育再生加速プログラム(AP事業)「テーマV. 卒業時における質保証の取組の強化」に採択が決定
- 上記をきっかけとして、学長が旗振り役となり、全学的な教学マネジメント体制の確立を加速

学生による自発的な学修、学生自身による学修改善を通して、学生一人ひとり異なるサクセスに向けた「確かな成長の実感」「充実感」を持った学生生活を送ることを大学としてサポートする「スチューデントサクセス」を重視し、学修者本位の教育・学生支援を推進



取り組み中で直面した困難と乗り越え方

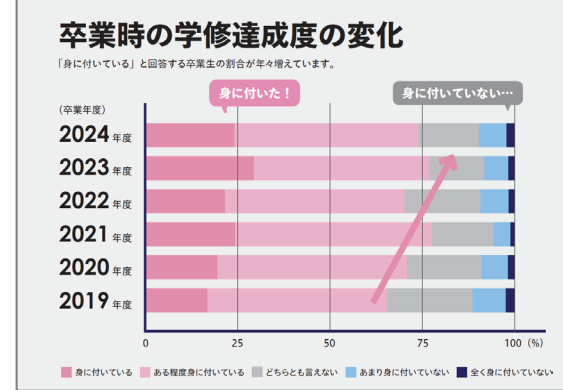
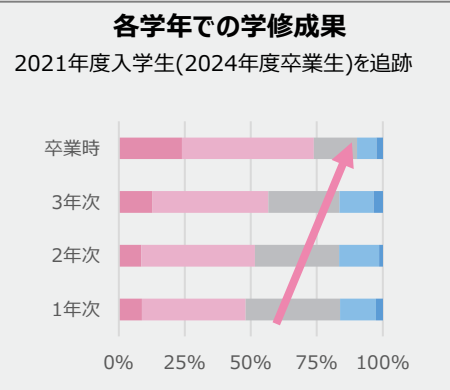
【困難】
学修成果を把握し、データに基づく教育改善を試みたが、教員間で教育改善に向けたデータの重要性が理解されず、取組への参画意識が低い状況にあった

【乗り越え方】
授業アンケートの実施や、その結果に基づく授業改善に向けたPDCAを義務化する等の工夫を講じた結果授業アンケートの実施率が100%近くに上昇し、かつデータを活用した現場のFDが活性化した

全学的な体制確立に向けた主な取組

全学的な体制確立によって得られた成果

- 学年が上がるにつれて学修成果が伸びていることを確認
- 卒業時の学修達成度も年々上昇
- 「卒業生の学習面・学生生活面に関する満足度調査」において、肯定的な回答が87.2%



茨大に入学してよかった

87.2%
2024年度卒業生

卒業時の学習面、学生生活面の満足度調査における肯定的な回答の割合

大学からの一言メッセージ

学生が「なりたい自分」を目指し挑戦し続ける「サクセス」の実現には、データに基づく改善とともに、学生一人ひとりに真摯に向き合うことが不可欠です。大学教育を学生と教職員が一緒になって作り上げる「学生中心の大学」に向けて、一人ひとりの歩みに寄り添う「伴走型支援」を強化するなど、変化を恐れず教学マネジメントを進化させていきます。

4 取組事例(国立)：茨城大学

～スチューデントサクセス「なりたい自分になる」を支える教学マネジメント体制の確立～

② 茨城大学コミットメント～学生、教職員、地域の人たちが関わり合い、学生の成長にコミットする教育の仕組み～

1. 入口： DPへの意識付けとモチベーション向上

フレッシュマンサクセスセレモニーの開催

- 入学式直後に、フレッシュマンサクセスセレモニーという式典を開催し、**DPである「茨城大学型基盤学力」を学生に意識付け**し、学生自身が能動的に動くことの重要性を伝えるとともに、**学生の「なりたい自分になること」を後押し**
- 学長による大学での学修に係る説明に加え、先輩学生が登壇・学長と対談し、新入生へエールを送る

イバダイサクセスパスポートの配布

- 全新入生を対象に、「イバダイサクセスパスポート」を配布
- 同資料には1年次から卒業時までの成長度等が掲載されており、学生が**自身の成長を具体的にイメージできる機会**に繋がっている



2. 在学中： 主体的な学外活動、多様な学び

iOP(internship Off-campus Program)の実施

- iOPという独自の**学外学修プログラム**を設置
- 学生は**クォーター制**を活用して3年次の第3クォーターを中心に、**自ら計画したインターンシップや海外留学、ボランティア活動などの学外学修に専念**
- 学内の授業だけでは身に付きづらい、実践力や社会性など、**専門分野の学力以外のDPの涵養や自主的学修を促進**する役割を担う

プラスIプログラムの実施

- プラスI(アイ)プログラムという全学部等学生を対象にした独自の**分野横断的な教育プログラム**を設置
- 学生は自身の興味・関心**に合わせて、6つのプログラムから学ぶものを選択
- 幅広い教養や、分野を超えた融合的専門知識を身に付けられるプログラムとなっており、学生の**主体的な学修を後押し**

3. 出口： 厳格な成績評価と外部視点による質保証

卒業研究ルーブリックの策定・活用

- 大学での学びの集大成である**卒業研究の実質化を図るとともに、卒業時の教育の質を高めることを目的として、全学部で卒業研究ルーブリック**を策定・活用
- 卒業論文の評価の透明性や公平性が向上し**、教員自身も評価の妥当性を確認できるツールとして有効に機能
- 学生への効果的な指導にも貢献

アドバイザリーボードからの意見聴取

- 各学部外部有識者から構成されるアドバイザリーボードを設置し、地域のニーズ等も踏まえ**地域と協働**しながら教育施策を検討する仕組みを構築
- 例えば、卒業研究ルーブリックの策定にあたっては、当該アドバイザリーボードから意見を聴取
- 毎年度学修状況に係るデータを共有しながら、教育の質保証を共に実施

取組を支える基盤

4階層質保証システム：

- ①教員個人、②学科、③学部、④全学の4階層で
教学データを活用する現場主導のボトムアップの体制

DPルーブリックに基づくポートフォリオ：

DPの学生の自己評価をレーダーチャートで可視化し、
現状と目標とのギャップを学生自身が認識できる仕組み

スチューデントサクセスセンター：

アカデミック・アドバイジングや教職協働での学生サポート
を通じて、学生の主体的学修を支援する専門組織

5 取組事例(国立)：愛媛大学

～全学と学部等との密接な連携体制構築による教学マネジメントの加速～

① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 大学法人化や認証評価開始に伴い、**供給者視点から学修者視点での教育改革**が求められるようになった
- このような状況を踏まえ、教員個人の努力に頼るのではなく、大学全体で教育改革に取り組む方針に転換
- 「**教育・学生支援機構**」*の設立(2004年12月)を皮切りとして、**愛媛大学憲章の制定(2005年3月)**、**教育企画室の設置、教育コーディネーター制度の導入(2006年4月)**等、教学マネジメントの全学展開を本格的に始動

* 全学的な教学マネジメント推進のため設立された組織。教職員が各学部等と連携して、教育活動、カリキュラム等の開発、研修、調査研究、学生相談・支援活動を担う。2024年度からは、従来のセンター制を廃止し、緩やかなユニットを組み業務を行う**ユニット制**を導入。これにより、**社会情勢に対応した機動的な教育改革等の推進**が可能。

全学的組織である**教育・学生支援機構**に設置する教育企画室が全学的な教育改革の先導的役割を担い全学の意見を集約・検討するとともに、**各学部学科、研究科**には教育責任者、教務委員等としての**教育コーディネーター**を配置して各学部等での意見をすくい上げることで、**全学と各学部等との密接な連携**により、以下の全学的な教学マネジメントの取組を加速

【教育目標やそれに紐づくカリキュラム・授業内容の整備・改善】

- 正課教育の教育目標であるディプロマ・ポリシー(以下、DP)の他、正課教育以外の準正課教育や正課外活動も踏まえた教育目標として「**愛大学生コンピテンシー**」(2012年7月)、大学院教育で育成する幅広い汎用的能力を示した「**愛大トランスファラブルスキル**」(2022年11月)を策定
- 「**愛大学生コンピテンシー**」や「**愛大トランスファラブルスキル**」に合わせて、カリキュラムを整備
- カリキュラムマップやシラバスのチェックリストを作成し、カリキュラムと授業内容の紐付けを担保
- 「**愛大学生コンピテンシー**」(2018年11月、2023年7月改訂)やカリキュラムや授業内容は、社会変化等に合わせて都度見直し・改善

【学修成果の可視化や情報公開】

- アセスメントプランに基づき、直接評価と間接評価を実施
 - ※直接評価：成績評価、学籍異動状況の確認、ルーブリックなどの活用
 - ※間接評価：入学時、各学年末、卒業時、卒業後3年後等にアンケートを実施
- ウェブサイト「**愛大生の学習成果の公開**」では、個々の学生の学修や研究の成果、受賞等の成果を公開

【アウトリーチ型学修支援体制の整備や、FD・SDによる他大学への普及】

- アウトリーチ型のアカデミック・アドバイジング
- 卒業予報を活用した早期アラート
- アカデミック・アドバイザー養成講座
- 大学間連携を通じたFD・SD

学生の主体的な学びを支援

取り組む中で直面した困難と乗り越え方

【**困難**】
各教員の属人的な実践の積み重ねにとどまり、**学修者視点での体系的に欠けていた**

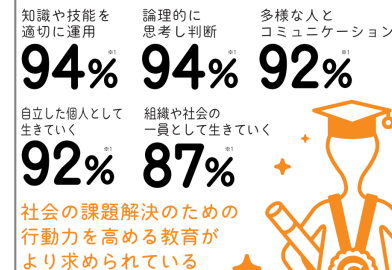
【**乗り越え方**】
個々の教員任せにせず、研修を通じて学部間で議論を重ねることで、DPを含む3つのポリシーや「**愛大学生コンピテンシー**」を策定した
研修は、教育コーディネーターや関係部署の教職員が参加し、個々の授業改善のみではなく、**組織的な事項を検討する機会**としても活用している

全学的な体制確立に向けた主な取組

全学的な体制確立によって得られた成果

- **卒業時の愛大学生コンピテンシーの習得率は概ね9割以上**
- **企業の愛大卒業生への満足度は99%であり、「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」では、中四国地方のランキングで第1位**
※「データから考える愛大授業改善VOL.08(教育企画室発行)」に掲載
- 「**教育・学生支援機構教育企画室**」による、FD・SDの推進、複数回の研修講師派遣や研修前後のコンサルティング等を通じた組織開発支援の実績により、**文部科学省から教育関係共同利用拠点として継続的に認定**
- 学修者本位の教育を実現する日本型アカデミック・アドバイジングの体制構築に関する取組が**文部科学省からミッション実現加速化経費として予算措置**

卒業時の愛大学生コンピテンシーの習得率



大学からの一言メッセージ

組織体制や規程の整備、財政基盤の確立等の「ハード面」のみではなく、真に実効性のある改革実現のためには、教職員のカリキュラムに対する考え方、教職員とのコミュニケーションのあり方、組織文化等の「ソフト面」が重要だと考えております。今後は、こうした「ソフト面」をより一層意識して、FD・SDや学修支援の拡充等を進め、愛媛大学憲章で標榜する「**学生中心の大学**」を実質化します。

② アウトリーチ型学修支援体制の整備や、FD・SDによる他大学への普及

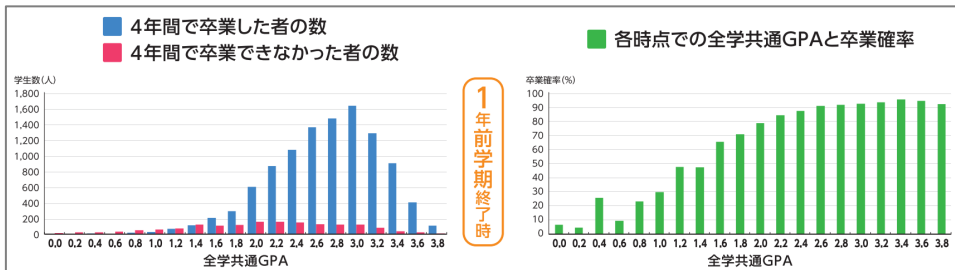
学修支援体制の整備

アウトリーチ型のアカデミック・アドバイジング

- 学生が困ってから相談に来るのを待つのではなく、全学生を対象として、**大学側から積極的に働きかける先行的なアドバイジング**へ転換(例：新入生を対象に授業の出欠、成績等を活用した早期アプローチと学部と連携した個別支援)
- 授業、面談、セミナーを通じて、**専門家によるアドバイジングを一体的に実施**
- 各種支援の成果を分析し、支援内容を評価するとともに、学部等へ情報提供し、カリキュラムや教育改善を提案
- **卒業予報などを踏まえた学生へのアドバイジング・フィードバックも実施**

卒業予報を活用した早期アラート

- 過去 1 万人以上の卒業生データから、**GPAと卒業確率の相関関係**を明確化し、学生自身が現在のGPAと客観的に照らし合わせることで、**早期に学修改善に取り組むきっかけ**を創出



全学と学部等との橋渡し「教育コーディネーター」

- 各学部学科、研究科に**約60名の教員が「教育コーディネーター」**として配置され、**全学的な教育方針と各現場のニーズをつなぐ重要な役割**を担う
- **教育コーディネーター向けの研修を1年に3～4回実施**し、全学的な教育改革の方向性について共通認識をもつ機会を創出
- 各学部等の**統括教育コーディネーター**は、教育学生支援会議の構成員として、**学部等の代表かつ全学的な観点で、機構業務の重要事項の審議**に関わる

大学間連携を通じたFD・SDの実施

「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)」の運営

- **四国地区の大学・短期大学・高等専門学校、計36機関が加盟**
- SPODフォーラムの開催、新任教員研修や体系的なSDプログラム、研修講師派遣の実施、FD担当者の養成、SDコーディネーターの養成と認定、フォローアップ等による**継続的なFD・SD**などを実施
- 単独でのFD・SDの実施が困難な大学もあるため、**FD・SDや教学IRの重要な基盤**として位置づけ

愛媛大学モデルによる専門人材の養成と認定

- 事前学習から研修後の職場での活用、組織の課題解決までを見据えた愛媛大学モデルによる**2日間以上の専門人材養成講座を全国の教職員を対象に実施**
- 専門人材の能力を証明する認定事業では、個別メンタリングや審査結果のフィードバックを行い、**養成した専門人材への継続的な支援を提供**



行動計画の策定と追跡調査による組織開発支援

- FD・SDで各受講生が立案したアクションプランを所属大学で実行した成果について**研修の半年後に追跡調査を実施**
- 所属大学でアクションプランを実行した結果を踏まえ、フォローアップまで行うことで**組織開発へつながる実効性の高いFD・SDを実現**

6 取組事例(国立)：金沢大学

～学長のリーダーシップによる抜本的な教育改革と教育・学修環境のDXによる「自ら学び、自ら育む」教育環境の構築～

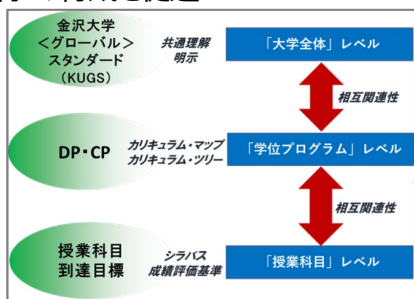
① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 平成20年、旧来の学部・学科の垣根を超え、異なる学問分野が融合した学域学類制への組織再編を実施
- 平成26年、異なる学問分野を束ねる大学全体の教育目標として、**金沢大学<グローバル>スタンダード(KUGS)***を策定
- KUGSを踏まえ、学長のリーダーシップが浸透しやすい組織を構築**したことが契機となり、全学的な教学マネジメントの推進が加速

* 学士課程では、「専門分野における確かな基礎学力と総合的視野を身に付け、国際性と地域への視点を兼ね備えた人材」、大学院課程においては、「高度な専門的知識・技能と学際性を兼ね備え、国際的視野を有する研究者及び専門職業人等、グローバル化する社会を積極的にリードする人材」を育成するための教育方針として、それぞれの課程でKUGSを策定

大学全体レベルの教育・学修目標であるKUGSを基軸とした**教学マネジメントの3階層**に応じた**教育・学修目標の明確化**と、それを支える**組織的な学修支援体制**、**教育・学修環境のDX**を中心とした改革により**学生自身が「自ら学び、自ら育む」教育改革を推進**し、国際社会の中核的リーダーたる“金沢大学ブランド人材”の育成を促進



データ収集

【モニタリング結果等を活用した教学IR】

- 毎年度のモニタリングや数年ごとのレビューを通して、学修成果に関するエビデンスを収集
- 内部質保証に関する教育改善や調査研究等を全学的に行う組織である「**教学マネジメントセンター**」において、各種学生調査の結果等を教学IRにより把握し、教育改善やFD等に活用

教育改善

活用

【組織的な学修支援体制の構築】

- 全学生を対象にアドバイザー教員を配置し、年に2回の個別面談を義務化
- 特に、1年次に進路選択を行う総合教育部には文系・理系それぞれに専任アドバイザーを配置
- 日々の学修支援をはじめ、経済的支援、メンタルケア、キャリア支援まで包括的な学生支援を実施

支援

【信頼性のある厳格な成績評価】

- 適正な成績評価及び合理的な成績分布の実現の一環として、学内やWebサイトで成績分布等を公表し、学内での緊張感の醸成や社会からの成績評価の信頼性を確保
- 専攻選択や進路選択に活用

全学的な体制確立に向けた主な取組

取り組む中で直面した困難と乗り越え方

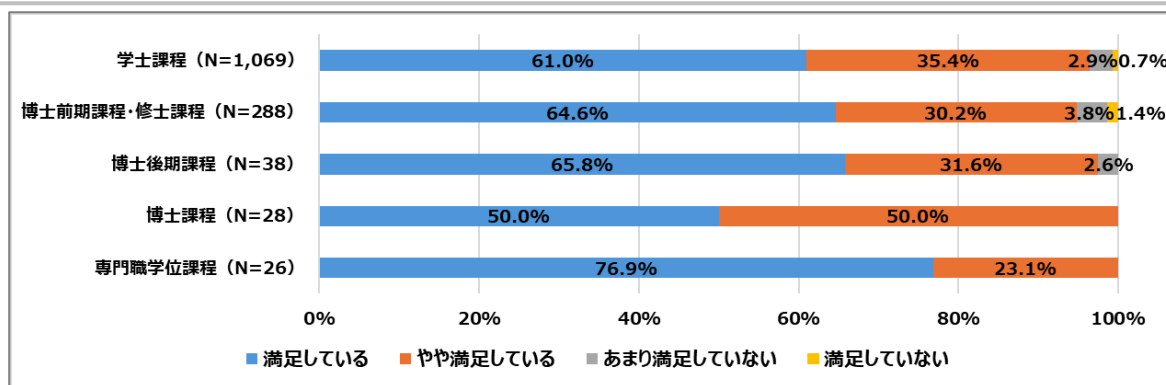


【困難】授業評価などに関する取組方針が部局ごとに異なっており、全学共通の枠組みの下で教学マネジメントを推進するのが困難だった

【乗り越え方】全学的な教学マネジメントを推進する「**教学マネジメントセンター**」を設立
各部局との対話を重視しながら全学的な制度設計を推進し、「**三つのポリシー**」を再整理した

全学的な体制確立によって得られた成果

- 令和6年度卒業・修了者アンケートにおける「**学生生活満足度**」調査によると、**いずれの課程においても「満足している」、「やや満足している」の合計は9割以上**
- 日本経済新聞社・日経HR共同調査「**採用を増やしたい大学ランキング**」(2025年)では**全国で第1位**



大学からの一言メッセージ

金沢大学<グローバル>スタンダード(KUGS)を軸に、学生1万人規模(大学院生含む)の大学全体の協働意識を育むために、部局との対話を重視しながら、教職学協働による教学マネジメント体制を強化していきます。常に、学生の成長実感や学修達成度の向上に努めていきます。

② 信頼性のある厳格な成績評価や学修成果の可視化と学生を支える組織的な学修支援体制の構築

信頼性のある厳格な成績評価や学修成果の可視化

成績評価の厳格性・公正性、信頼性の確保

- 厳格・公正な成績評価のため、

学内限定のWebサイト上で開講科目ごとの成績分布を公開し教職員が参照できる仕組みを構築することで、公正な成績評価に向けた自己点検を促進

- 適正な成績評価及び合理的な成績分布の確保により、成績評価の標準化を実現

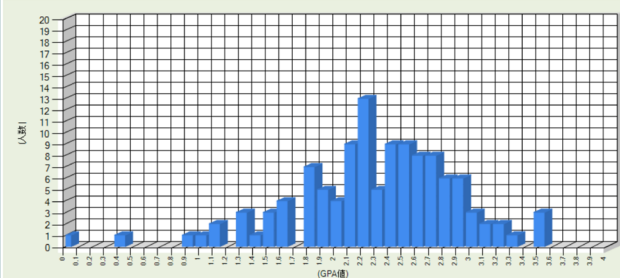
- 学士課程では、学類・年次ごとの1年間の成績分布(年間GPA)を

Webサイトで公表し、社会からの成績評価の信頼性を確保

大学独自のアワードシステムによる学修成果の可視化

- 正課の教育プログラム(データサイエンス教育やSTEAM教育等)における学生の在学中の伸びや成果を可視化
- 「ブロンズ」、「シルバー」、「ゴールド」、「プラチナ」の4段階の到達目標を設けている教育プログラムの場合は、それぞれの段階で修了証を発行
- アワードシステムは、学生の学びの意識付けや、成長実感のきっかけになるとともに、学生にはインターンシップや就職活動での活用を促進

2024年度
XXX学域 YY学類 117人
1年



(学外公表)年間成績分布状況グラフ

組織的な学修支援体制の構築

組織的な学修支援

- 学生支援の専門組織「KUGSサポートネットワーク本部」を中心に、各部局や相談窓口が連携した組織的な広域ネットワークを構築
- 日々の学修支援をはじめ、経済的支援、メンタルケア、キャリア支援まで包括的な学生支援を実施

学生の悩みを早期に発見するアウトリーチ型の支援

- 学士課程から博士課程まで全学生を対象にアドバイス教員を配置
- 前期・後期1回ずつ、年に2回の個別面談を制度化
- 1年次に進路選択を行う「総合教育部」には、文系・理系それぞれに専任のアカデミック・アドバイザー(教員)を配置し、定期的な個別面談や助言等を実施
- 博士課程の学生面談では、研究の進捗状況や研究環境全体に関する問題の早期発見、相談、助言等を実施
- 面談情報はポートフォリオに記録され、アドバイス教員が変更となった場合にも、1年次の記録を遡って確認可能
- 面談時に、面談担当者が個人では対応しきれない相談や注意を要する状況があった場合は、相談内容や状況に応じて、学生所属組織におけるサポート体制の構築や、保健管理センター等の専門窓口や教育担当理事・副学長との連携により、継続的に学生を支援
- 学生支援の実質化と、全学で一貫した体制構築を目的に、「学生との面談に関する手順書」や「教職員必携 学生サポートガイドブック」を作成し、配布

取組を支える基盤

各種学生調査の体系化

学生調査の体系的再整備によって、「大学全体」「学位プログラム」「授業科目」レベルでの教育成果・学修成果を俯瞰できるようになった

教学IRデータを活用した内部質保証サイクルの確立

教学IRデータに基づき、学位プログラム及び授業科目レベルの点検・評価・改善の内部質保証サイクルが確立されている

学外への積極的な情報公表

FACTBOOKやダッシュボードにより、授業評価アンケート結果や学生の学修達成度等の情報を積極的に公表する文化が醸成されている

① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 認証評価や自己点検評価等による評価疲れ、部局間の横断的な連携不足といった制度設計型の質保証システムの課題を踏まえ、**伴走支援型の教学マネジメント**への転換を推進し、部局の自律的な教育改善を支援する組織として「**教育開発推進センター**」を設立
- 入試から卒業までを一貫して捉える「**エンロールメント・マネジメント**」の視点のもと、教学IRデータに基づく伴走支援と教学マネジメントの全学展開を本格化

教育開発推進センターにおいて**データを一元的に集約・分析**し、各部局や学外に積極的に提供することで、**各部局での教育改善や学生の成長実感を促進**

教育開発推進センター

- 「教学マネジメントシステム」*を開発・導入し、各部局が別々で収集・保有していた入試データや教務データ等を一元管理
- *入学から卒業までの様々な教学データを可視化するBI(ビジネスインテリジェンス)ツールであり、全教員が利用可能

データ分析

【学修成果の把握・可視化】

- 入学から卒業までの各フェーズで学生ごとの学修成果を可視化
- 学修成果可視化のため、ディプロマ・ポリシー(以下、DP)と授業カリキュラムの紐づけや、共通ルーブリックを策定
- ポートフォリオによる目標設定や振り返りを実施

取り組む中で直面した困難と乗り越え方



【困難】
教育開発推進センターによる伴走型支援に移行するにあたり、各部局から事務作業の増加を懸念する声が上がった

↓

【乗り越え方】
BIツールを用いて学生の学修成果等のエビデンスを提供できるようになることで、事務作業を抑制できることを丁寧に説明し、各部局の理解と協力を得た

全学的な体制確立に向けた主な取組

データ提供・伴走支援

各部局

- 教学IRデータやBIツール等を利用し、教育改善の取組を自律的に推進
(例)選抜区分別の就職率やコア科目成績、アセスメントテストスコアの経時変化といった教学IRデータを各部局に提供し、教育成果や学修成果の点検・検証を行う

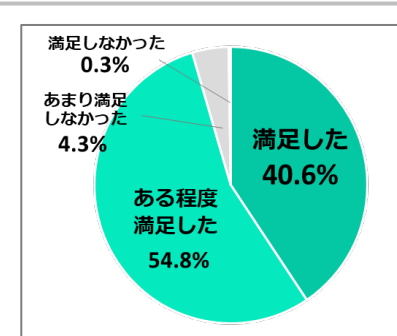
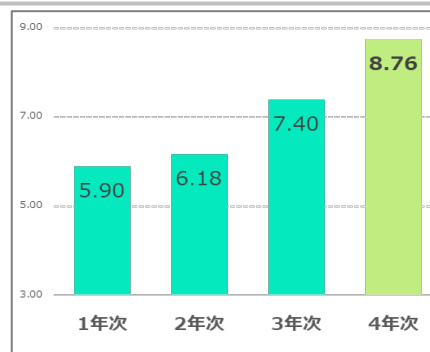
データ提供

【学外への積極的な情報公表】

- Webサイト「そのサガ見える」による、学修成果等の企業や地域等への発信
- 広報誌「かちがらす」による、学生の活動や教育改善の取組の発信

全学的な体制確立によって得られた成果

- ポートフォリオによる定期的な目標・振り返りを通じて、**7割強の学生が、自分で目標を立てて実行し、自己点検・改善する能力が身についた**と回答
- 各部局による自律的な教育改善の取組等により、**学修成果に関する各学生の自己評価が約50%向上、教育満足度は約95%**
- 「そのサガ見える」や「かちがらす」による積極的な情報公表の結果、学生が教職員や周囲から声をかけられることが増えることで、**モチベーション向上に繋がったり、県外からの学生が卒業後も佐賀県に定住することで、地域の定着にも繋がったりしている**



大学からの一言メッセージ

本学は今後、生成AIの活用等による業務効率化と教育の質向上を両立するとともに、リカレント教育を核とした「地域・他大学連携プラットフォーム」の構築に注力してまいります。このような全学的な意思決定を伴う取組は、教職員が教学マネジメントの本質を深く理解するうえでも貴重な研鑽の機会となるものであり、重要な取組であると考えております。

② 入口から出口までの学修成果の把握・可視化と積極的な情報公表

学修成果の把握・可視化

- DPの基盤として位置づけている、全学共通で卒業までに身に付けるべき力「佐賀大学学士力」*を軸に、入学から卒業までの各フェーズで学生ごとの学修成果の可視化を実施
- 学修成果の把握・可視化を実現するため、DPと授業カリキュラムの紐づけや、ルーブリックを策定
- 学修成果の把握・可視化は、主観的評価である学生の自己評価と、客観的評価であるルーブリックによる評価やアセスメントテストを組み合わせ実施

* 佐賀大学学士力：「1. 基礎的な知識と技能」「2. 課題発見・解決能力」「3. 個人と社会の持続的発展を支える力」から構成される

入学前後

入試データと入学前教育との連携

- 入試データも踏まえて大学での学びの概要を入学前に理解し、高校から大学への円滑な移行を実現

「佐賀大学学士力」の自己評価

- 入学時点の状態を学生自身が評価し、学びのスタート地点を明確化

在学中

ポートフォリオの活用

- 毎学期、自身の学びの振り返りを記述し、4年間の学期ごとの成長記録として蓄積
- 授業成績や自己評価データをレーダーチャートで可視化

チューター制度

- 全学生を対象に、毎学期、ポートフォリオの内容を踏まえたチューター面談を実施
- 各学部チューター教員が学生の学修成果の深掘りを支援

卒業前後

卒業認定申請

- 最終学期に、これまでの学修成果を総合的に振り返る「卒業認定申請書」を作成
- 入学時の自分と比較して、4年間で何ができるようになったのかを記述し、佐賀大学学士力の達成度を振り返る
- チューターによる学生への呼びかけ等により、卒業認定申請書の提出率も高い水準を維持

学外への積極的な情報公表

Webサイト「そのサガ見える」

- 大学のWebサイト「そのサガ見える」では、学生の成長や学修成果を企業や地域など社会へ分かりやすく情報発信
- 学生の「佐賀大学学士力」の到達度や学修時間・GPA等をグラフで可視化するとともに、ステークホルダーの意見をもとにした教育改善も紹介
- 大学の教育力をデータで示すことで、社会的信頼を得るとともに、学生のモチベーション向上も促進

ティーチング・ポートフォリオを作成している教員



99%

2025年3月31日時点

教育貢献度評価に基づく教員へのインセンティブの支給



180件

2024年度

教育改善支援取組採択件数



37件

2020~2024年

広報誌「かちがらす」

- 広報誌「かちがらす」では、学生や保護者、地域等に向けて、大学の特色ある取組や、学生の学び・活動をインタビュー記事などを通じて、学修成果を分かりやすく発信
- ステークホルダーからの意見をもとに大学が取り組んだ教育改善の特集も掲載し、教育改善サイクルを社会へ周知
- メディアの取材依頼など、外部の関心を集める他、学生は自身の活動が誌面に取り上げられることで、モチベーションが向上



① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 平成17年度に、従来型の教養科目と専門科目との区分を廃して「**全学科目**」と位置づけ、各学部の教育目的の達成に必要な全学科目の企画・実施体制を整備
- 上記を中心とした教育改革を推進・支援していくため「**全学教育機構**」*を設立し、教学マネジメントの全学展開を本格化

* 各種教育改革の推進・支援のため全学的に設立された組織。令和4年10月に「**教育基盤機構**」に改組。令和7年4月現在、未来教育推進コア、教学マネジメント部門、アドミッション部門、キャンパスライフ支援部門、全学教職センターから構成。

「人」と「技術(生成AI)」の両面から学修支援を推進し、**学生の分野横断的な学びを実現する「全学分野横断創生プログラム(NICEプログラム)」を構築**

【全学分野横断創生プログラム(通称：NICEプログラム)】

- 学生は、自身の所属学部の学位プログラムで学ぶ専門分野(メジャー)に加え、その他の専門分野(マイナー)も学ぶことが可能
- 40以上の多様なマイナー・プログラムを用意
- マイナー・プログラムの修了要件を満たした際、申請を行うことで、マイナー・プログラム修了証が発行され、学修成果の可視化が可能

【「人」による学修支援】

- 科目に予め組み込まれたアドバイジング
- アカデミック・アドバイザーの能力開発

【「技術(生成AI)」による学修支援】

- 生成AIによる科目レコメンドシステム
- アカデミック・アドバイジングにおける科目探索を支援しつつ、分野横断型の学びを実現

取り組む中で直面した
困難と乗り越え方

【困難】

メジャー・マイナー制の導入等によって、多様な履修が可能になった一方、全学共通のディプロマ・ポリシー(以下、DP)のみでは各プログラムとの関連性が薄いため、教育の質保証が困難な状況であった

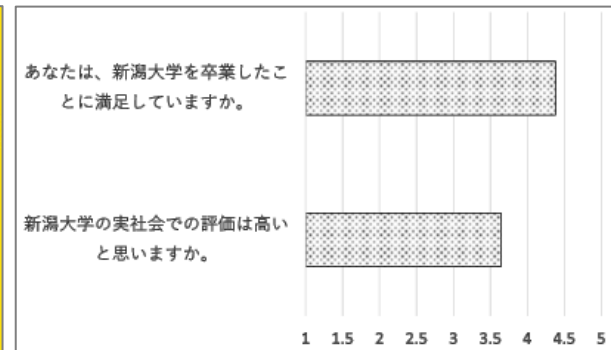
【乗り越え方】

プログラム・コースごとにDPを策定し、人材育成目標を再定義
 これにより、DPに基づくカリキュラムの策定等の教育課程の編成や、さらにアセスメントプランの策定が可能となった

※現時点で、上記のアドバイジングや生成AIによる学修支援は、NICEプログラムに限定した取組となっているが、今後同様の取組を全学的に展開する方針である

- 学生一人ひとりの興味・関心に応じた**分野横断型学修の実現**

- 卒業生に対する5段階調査では、**本学を卒業したことに満足度は平均4.38、本学に関する実社会での評価は平均3.46**といずれも高い数値
 ※学修成果検証アンケート調査 報告書(平成30年度～令和2年度卒業生及び就職先企業対象)



全学的な体制確立によって得られた成果

大学からの一言メッセージ

学生の自律的学修を支えるための環境整備を進め、アカデミック・アドバイザーの養成を加速するとともに、社会での活躍を見据えた「アドバイジングの視点」を含むプレFD(大学院生等が博士課程修了後、自ら有する学識を教授するために必要な能力を培う機会)を導入します。これにより、分野横断的学修を支える指導体制を強化し、次世代を担う人材の育成と学生一人ひとりの確かな成長を両立してまいります。

② 「人」と「技術(生成AI)」で学生の学びを支える学修支援体制

「人」による学修支援

科目に予め組み込まれたアドバイジング

- 1年生と2年生を対象に「**分野横断デザイン**」※1、4年生を対象に「**分野横断リフレクション**」※2という科目を開講
- 学部を超えた学びを**自身でデザイン**し、**リフレクション**することを通じて、**アカデミック・アドバイジング**についても理解を深められ、**アドバイジングを受けることへの障壁も軽減**する役割を担う
- なお現在、アカデミック・アドバイジングは、分野横断的な学びをする学生のみを対象として行っているが、**今後アカデミック・アドバイジング専門組織を設ける等、全学的な取組として拡充予定**

※1 どのようなマイナーを学ぶか、学生自ら学修計画をデザインする科目

※2 自身のマイナー学修の達成点を明らかにし、振り返りを行う科目

アカデミック・アドバイザーの能力開発

- 新任・研究者教員が、**分野横断的な視点を養う「学問の扉」**※3という科目を**学生とともに受講**し、受講翌年度に同科目の担当を担う仕組みを設けることで、**教員の教育力・学修支援力の段階的な向上を実現**
- 教員は「**学問の扉**」を通じて、**多様な学問分野の考え方**を学び、自身の専門分野を客観的に捉え直す
- これにより、学生に対して学問の多様性や分野を越えて学ぶことの重要性を伝える**学修支援の力を修得**

※3 様々な学問分野を知った上で、自身の専門分野を客観的に捉える科目

学生の主体的な学びの実現

- 既存のパッケージ化されたマイナーを選ぶだけでなく、学生自らが興味・関心や探求課題に合わせて、**分野横断的な学びをデザイン**
- 学生は、「分野横断デザイン」や「分野横断リフレクション」科目、アカデミック・アドバイザー、生成AIなど様々な資源を活用しながら、**学びを深化**
- 入学時の所属学部に関わらず、**自身のやりたいことを追求できる、柔軟な学修環境**を実現できる点も、分野横断的な学びの魅力の一つ
- また、自身がデザインした学びの成果が大学のWebサイトで公表されることで、**学生は確かな成長を実感し、さらなる主体的な学修へとつなげる**



「技術(生成AI)」による学修支援

生成AIによる科目レコメンドシステム

- 生成AIを活用した科目レコメンドシステム「**CR (Course Recommend) システム**」*を導入
- シラバス検索システムにおけるキーワード検索ではなく、「**持続可能なまちづくりを政策と農業の視点から学びたい**」といった学生の興味・関心・問題意識に対して、**全学のシラバスを意味的に検索し、最適な科目を推奨理由とともに提示**
- アカデミック・アドバイジングにおける科目探索をサポート**する役割を担う
- CRシステムは**ハルシネーションを抑制する技術として位置づけられるRAG (Retrieval-Augmented Generation : 検索拡張生成)**という技術を用いて、**シラバス情報をまとめたCSVファイルをもとに、質問への回答を作成し、AIモデルのランダム性を最小限に抑え、実行のたびに出力が変化するリスクも低減**

* 現在、CRシステムは「分野横断デザイン」科目内でのみ使用しており、担当教員がシステムの限界を十分に理解したうえで、学生にもその特性と注意点を説明し、出力結果を鵜呑みにしないよう指導している

学生・企業・教員による共同開発

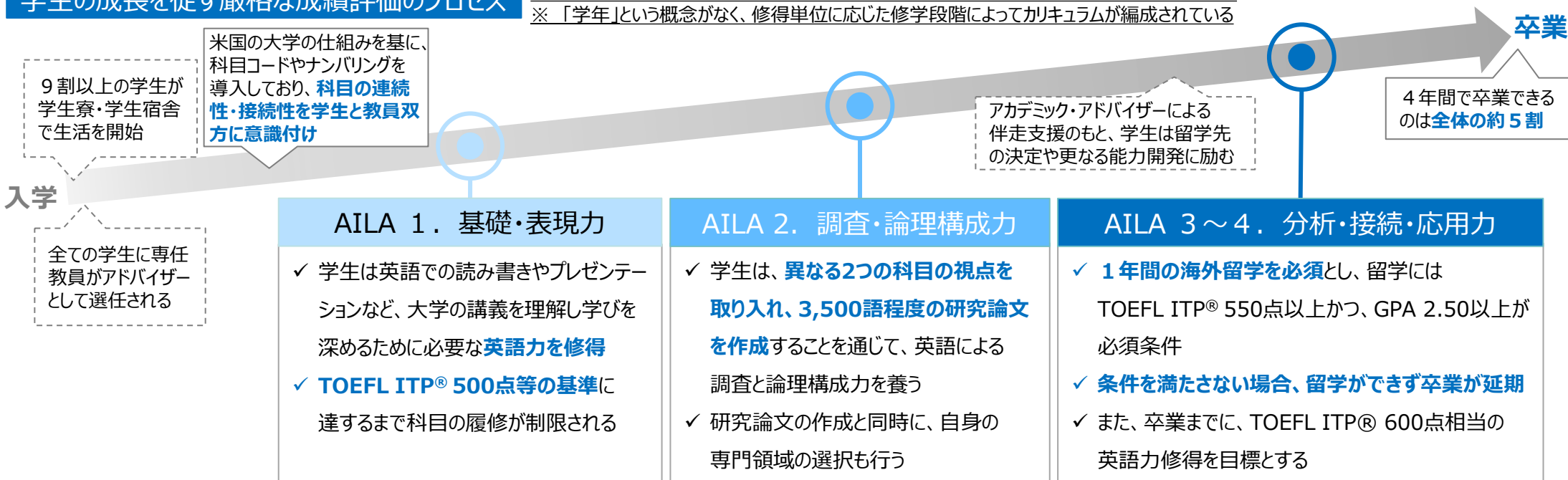
- 開発企業と教員だけでなく、**学生もアイデアの提供やシステムの検証等**、システム開発に参画
- 本取組の起点は学生のアイデア**
- CRシステムの有効性について、**85%以上の学生が有用**であると回答

教育理念・取組の背景

- 「**グローバルリーダーの輩出**」をミッションとし、少人数教育を通じた師弟関係のような人間的触発がある教育を重視するとともに、広範な事象に関する幅広い知識と深い理解、物事の本質を見抜く力、グローバルな視野と外国語による高いコミュニケーション能力を涵養する国際教養教育(リベラルアーツ)を教学理念としている
- 教育理念を具現化するため、開学以来、**世界水準の厳格な成績評価を徹底**している
- **留学を必修化**するなど、学生の国際通用性を重視している他、**海外教員が全体の約6割を占める**ことも、世界水準の厳格な成績評価を徹底することに寄与している
- **独自教育「AILA(応用国際教養教育)」を切り口に総合知と人格力を兼ね備えた**、世界で活躍できる人材育成に取り組んでいる

学生の成長を促す厳格な成績評価のプロセス

※AILAは4つのレベルに分かれ、**各レベルの能力基準に達した学生のみ**、次のレベルに進める
 ※「学年」という概念がなく、修得単位に応じた修学段階によってカリキュラムが編成されている

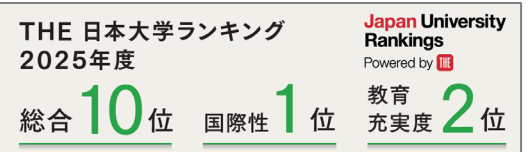


取組成果

■ **高い就職決定率**
 企業は卒業生を「**厳しい環境で鍛え抜かれたタフな人材**」であると高く評価している



■ **社会からも高い評価**
 グローバル教育に力を入れており小規模な大学ながら**社会からも教育の質が高く評価**されている



① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 2000年に京都造形芸術大学と京都芸術短期大学が統合し、総合芸術大学へと再編した際、**学生の満足度等の向上が課題としてあがった**
- 上記の課題解決のため、**授業アンケートの本格実施**や、**学生のFDへの参画が開始**し、これに伴い全学的な教学マネジメント体制確立に向けた取組が加速

学生参画型の教学マネジメントによる教育改善と成績評価の客観性向上の促進を重視

【学生参画型のFDを通じた教育改善】

- FDを主導する専門組織「FD委員会」は、授業アンケート等の分析を実施
- FDでは、授業アンケート結果等が各教員へフィードバックされるとともに、FDに参加している学生にその場でヒアリング
- FDでの議論を踏まえ、教員は授業の改善を検討



取り組む中で直面した
困難と乗り越え方



【困難】

教員ごとに評価基準が異なるため、科目ごとに成績分布の偏りが生じるなど、学修成果の可視化が不十分な状況であった

【乗り越え方】

「成績評価ガイドライン」を策定・導入し、各教員が共通の尺度で成績を評価できる体制を整備した

成績評価の客観性向上により
FDでの議論が促進

授業の質保証による
厳格な成績評価の担保

【厳格な成績評価】

- 成績評価ガイドラインの導入：教員共通の成績評価の尺度を定義
- ルーブリックの導入：学生の成果物への評価基準を明示化
※**芸術分野はルーブリックとの親和性が高く、学生の成果物を採点するプロセスを細分化し、ルーブリックに落とし込んでいる**
- 進級・卒業要件の厳格化：進級・卒業要件にGPAを含める

支援

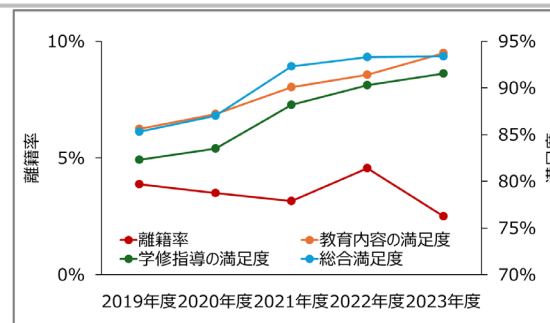
【学修支援に係る専門組織】

- 「学生支援センター(RAPPORT)」には看護師や保健師、臨床心理士等が在籍し、メンタル面などの支援を実施
- 「学習支援・教育開発課(2026年4月よりセンター)」には、アカデミック・アドバイザー等の専門職員が在籍し、履修指導などの学修支援を実施
→成績不振の学生への定期的な面談等、学修支援を重視する文化が醸成

全学的な体制確立に向けた主な取組

全学的な体制確立によって得られた成果

- 学部・学科・教員各レベルで**授業の点検・評価・振り返りを行う文化が定着し、授業の質が向上**
- 成績評価についても、**教員と学生双方の納得感が向上**
- 授業アンケートの結果、**学生の満足度等が向上**
- 初年次の離籍率が低下**



大学からの一言メッセージ

本学に深く根付く「学生第一」の理念のもと、教職協働の風土を礎に教学マネジメントの一層の高度化を推進めるとともに、情報発信を拡充し、教育機関としての社会的責任を果たしてまいります。

② 厳格な成績評価と教職協働による学修支援

厳格な成績評価

成績評価ガイドラインの導入

- ・ 教員個人の裁量による評価のばらつきを解消し、**全ての教員が共通の尺度で公平かつ客観的な評価**を行うため、成績評価ガイドラインを策定・導入

ルーブリックの導入、進級・卒業要件の厳格化

- ・ 成績評価基準をより明確にするため、**全学部・学科でルーブリックを策定・導入**
- ・ 芸術学部では、教員が学生の**作品に点数をつけるプロセスをルーブリックに落とし込んで**いる
- ・ ルーブリックで学修成果を測りきれない作品を、**卒業展等において学長賞や特別賞等で評価**する仕組みを導入
- ・ ルーブリックについては、**FD研修の題材**としても活用し、教員の理解を促進する他、学生からの声も改善に反映
- ・ **GPAを進級・卒業要件に含める**ことで、教育の質保証を強化

クォーター制の導入

- ・ 2024年度のカリキュラム改訂に伴い、**学びの密度を高め、学生の成長をより確かなものにすることを目的**に、クォーター制を導入
- ・ 授業アンケートに基づく**授業改善の頻度も高くなり**、教育の質向上に貢献

アセスメントテストによる汎用的能力の測定

- ・ 1年次及び3年次には、**アセスメントテストを実施し、社会で活躍するための汎用的能力を測定**

教職協働による学修支援

教職協働体制によるアカデミック・アドバイジングなどの学修支援の実施

- ・ **GPAを卒業・進級要件に含めたことから、一定基準以下の学生を対象とした学修支援が必要**と考え、アカデミック・アドバイジングの導入を決定
- ・ アカデミック・アドバイジング専門の組織「**学習支援・教育開発課**」を設置
- ・ アカデミック・アドバイジングは、カリキュラムに係る知識や、他部門との連携が豊富な職員が務め、教員は教育や指導に注力し、アカデミック・アドバイザー等の専門職員は学修支援に注力する形で、**専門性に応じて役割を分担しながら、教職協働で学生を支える体制・文化**が根付いている
- ・ 学修支援をさらに拡充するため、**2026年4月から「学習支援・教育開発センター」を設置予定**
- ・ **学生の主体的な学びとスチューデントサクセスの実現を支援**するため教職員によるアカデミック・アドバイジングや学修支援プログラムを実施する他、増加する**留学生のための日本語学習支援やFD等の教育開発を実施予定**



※なお、上記の取組は主に通学課程を対象に実施しており、通信教育課程の今後の取組については検討段階

取組を支える基盤

執行部主導の意思決定プロセス：

副学長・学部長や事務局長・課長等を中心とする教育推進会議が取組の方針等を決定するため、合議制に比べて迅速な取組遂行が可能

FD委員会による組織的な教育改善活動：

授業アンケートの分析と教員へのフィードバック、教員による振り返りの制度化、学生参画型FDの実施により組織的な教育改善を実現

カリキュラムの外部評価：

他大学や産業界によるカリキュラムのピアレビューを定期実施し、カリキュラムの質を担保・向上

① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 平成26年度大学教育再生加速プログラム(AP事業)「テーマⅠ. アクティブ・ラーニング」、「テーマⅡ. 学修成果の可視化」に採択が決定
- 上記をきっかけとして、全学的な教育改善へのデータ活用が本格化し、これに伴い全学的な教学マネジメント体制確立に向けた取組が加速

全学的な教育改善へのデータ活用を重視し、厳格な成績評価や学修成果の可視化等に係る取組を推進

【厳格な成績評価と学修成果の可視化】

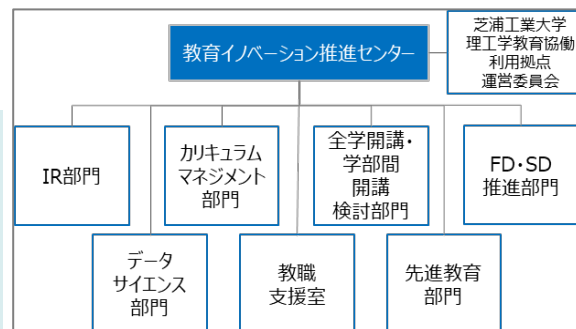
- mDP(Middle Level DP：学修・教育到達目標)の設定：ディプロマ・ポリシー(以下、DP)を詳細化した学修目標の設定
- 学修成果の把握：科目とmDPを紐づけ、単位取得状況から学修成果を把握
科目とmDPの紐づけの整合性は継続的に点検・評価・改善を実施
- 学修成果の可視化：独自ポートフォリオ「SIT(Shibaura Institute of Technology)ポートフォリオ」で学修成果をレーダーチャートとして可視化
各学生のポートフォリオは、全専任教職員が閲覧可能
- マイクロレディンシャルの導入：学修成果をオープンバッジとして証明

全学的な体制確立に向けた主な取組

【トップダウン型の実施体制】

- 学長主導型のガバナンスを支える「学部長・研究科長会議」とデータドリブンを支える「教育イノベーション推進センター」の設置により、トップダウン型のデータドリブンな教学マネジメントを実行できる体制が構築されている

支援



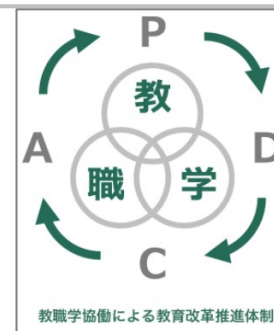
取り組む中で直面した困難と乗り越え方



【困難】
学修成果として、DPの達成度を把握しデータに基づく教育改善を試みるが、DPが抽象的でその達成度を測ることが難しい状況であった

【乗り越え方】
全学科・コースでDPを詳細化した学修・教育到達目標「mDP」を設定し、mDPと各科目の紐づけを徹底した結果、単位取得状況からmDPごとに学修成果を把握できるようになった

- データに基づく授業の点検・評価・振り返りのサイクルが確立し、授業の質が向上
- SITポートフォリオを通じて学部学科を超えた学修支援や、学部学科の良い取組が横展開され、大学全体の教育の質が向上
- 学修成果の可視化により、学生の学修意欲が向上
- 海外の大学ではマイクロレディンシャルを導入している大学が多いことも踏まえ、オープンバッジは学生の海外留学で役立っている
- 学生の大学教育に対する満足度等が向上し、退学率は毎年2%程を維持



全学的な体制確立によって得られた成果

大学からの一言メッセージ

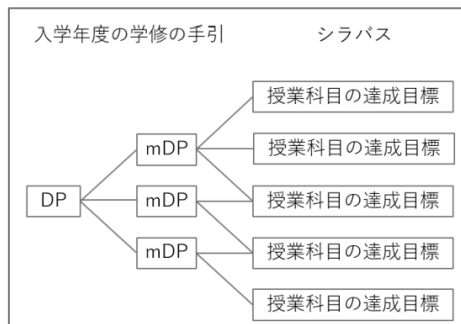
本学では、学長主導の強力なトップダウン体制のもと、教学支援の専門組織「教育イノベーション推進センター カリキュラムマネジメント部門」を中核とし、教職協働で教育改革を推進してまいりました。理工学教育共同利用拠点としての認定実績も礎に、教育施策に係る全学的な共通理解を醸成し、教職協働での取組を一段と加速させています。

② 厳格な成績評価と「SITポートフォリオ」による学修成果の可視化

目標設定とDPの浸透

mDPの設定

- 抽象度の高いDPを、**学科・コースごとの学修教育到達目標「mDP」**に詳細化し、DPを具体化している
- **mDPは学科・コースごとの専門性や教育内容に応じて設定**しており、本学の特徴的な取組の一つである



フューチャービジョンワークショップ開催

- **1年生全員を対象**に、DPやmDPの内容を理解し、自身のキャリアにどのように繋げていくか**グループワーク**で考える**ワークショップ**を開催
- 入学初期に**DPやmDPを意識づけ**るとともに、大学での学びの目的を理解し、学生の意欲向上にもつながる重要な取組である

厳格な成績評価と学修成果の可視化

科目とmDPとの厳密な紐づけ

- mDPに対応する科目の中でも特に、**主要授業科目**について、その**学修到達目標とmDPとの整合性**を持たせており、整合性は**継続的に点検・評価・改善**を行っている

学修成果の可視化

- 科目とmDPの紐づけによって、mDPごとに**単位取得状況から学修成果を把握**でき、SITポートフォリオで学生ごとに**学修成果の可視化**ができています
- SITポートフォリオには、単位取得状況やGPA、学科順位、授業外学修時間など、様々な学修データが記録されている

2019-02-14 (成績発表日) 時点での成績順位です。



組織的な教育の質保証

学部・学科を超えた指導体制

- 各学生のSITポートフォリオは、**全専任教職員が閲覧**できるため、**学部・学科を超えた学生の指導・支援**が可能である

学修データを活用したカリキュラム改善

- 全学生に関する学修データが揃っているため、それらのデータに基づいて、毎年、**カリキュラムの内容を点検・評価・改善を行うサイクル**が確立されている
- 教員が他学部・学科の学生のSITポートフォリオを閲覧することで、**他学部・学科の教育プログラムを知る機会**になっている他、**他学部・学科の良い取組を自身が所属する学部・学科で取り入れる**きっかけにも繋がっている

学びの証明・多様化とデータ活用の高度化

マイクロレデンシャルの導入

- 副専攻や分野横断の学びを修了すると**オープンバッジ**が**発行**される
- 成績評価のみだと学びの実感を持ちづらい部分もあるが、オープンバッジとして可視化することで**学びの実感**が得られ、学生の**モチベーション向上**につながると考えている

生成AIによる授業改善の試み

- 授業評価アンケートにおける学生からの意見や成績分布を生成AIに取り込み、**授業改善点を提案**してもらうことや、教員自身が担当講義の専門的内容に関する資料を生成AIにインプットし、**各授業科目に特化した生成AIによるティーチングアシスタントの導入**も試みている

① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- 平成28年度大学教育再生加速プログラム(AP事業)「テーマV. 卒業時における質保証の取組の強化」に採択が決定
- 上記をきっかけとして、全学的な教育改革を企画・立案・実行する機関「教育開発機構」を設立し、全学的な教学マネジメント体制確立に向けた取組が加速

学生の成長実感の向上を重視し、独自のPBL(Problem Based Learning：課題解決型学習)や学修成果の可視化等の取組を推進

【ポートフォリオによる学修履歴の記録、学修成果の可視化】

- ディプロマ・ポリシー(以下、DP)とカリキュラム・ポリシー(以下、CP)に一貫性をもたせ、全科目についてDPと紐づけを実施
- 各科目の成績評価から学修成果(DP達成度)を把握し、独自ポートフォリオ「TCU FORCE：Tokyo City University FOR Career Enrollment」でレーダーチャートとして可視化
- 学修成果をディプロマ・サブリメントで証明可能

【SD PBL(Sustainable Development Project organized Problem Based Learning)による学生の主体性向上】

- 1～3年次で必修の大学独自のPBL
- 全学部・学科を横断的に混ぜたチーム編成で、特定のテーマについて課題解決に取り組む
- 学生に成長実感をもたせる重要な科目であり、SD PBLに関する専門的スキルを持った教員を雇用し、本格的なPBLを実践

取り組む中で直面した困難と乗り越え方



【困難】

『SD PBL』：PBL型授業におけるグループワークにおいて、各学生の貢献度をいかに公正かつ妥当に評価するかという課題があった
『学修の可視化』：DP達成度評価が、実質的に科目成績の単純な積み上げにとどまっていた

【乗り越え方】

『SD PBL』：学生間の相互評価を導入することにより、グループワークを主体的に牽引した学生の貢献を適切に把握・評価する
『学修の可視化』：正課外活動や適性検査の結果をDPと紐づけ、達成度評価に加えることで、多角的な学修成果を可視化する



全学的な体制確立に向けた主な取組



【教育開発機構】

- 全学的な教育改革を企画・立案・実行する機関として、以下の5つの組織から構成される
- 数理・データサイエンス教育センター：データサイエンス教育の企画・実施等を担当
- FD推進センター：FDの企画・実施等を担当
- 教育開発室：SD PBLの企画・実施等を担当
- 教学アセスメント・IRセンター：教学IRデータの分析等を担当
- ICT戦略室：ICTを活用した教育内容の改善等を担当

全学的な体制確立によって得られた成果

- 学修履歴の記録や学修成果の可視化を通じて、**学生の学修意欲が向上**
 - SD PBLの受講により**学生は自身の能力の伸長を把握し、成長を実感**するというアンケート結果が得られている他、**学会や国際会議での表彰数が年々増加**
 - 都市生活学部ではTCU FORCEを「キャリアデザイン」という正課授業に組み込み、積極的な活用を促した結果、**就職実績が向上**
 - 卒業後もポータルサイトの利用やディプロマ・サブリメントの携帯ができ、大学と卒業生が継続的につながる機会が生まれることで**卒業後も自律的な学びが機能**
- ↓
- 毎年実施している学生実態調査では、**大学への満足度や自身の成長の実感度が、右肩上がり**で向上

大学からの一言メッセージ

本学は、教学IR体制を抜本的に拡充し、入試から就職に至る各フェーズの戦略立案において、データを最大限に活用する体制の構築を目指しています。エビデンスに基づいた意思決定を行う学内文化を醸成し、更なる教育の質の向上と学生支援の最適化を追求してまいります。

② 「TCU FORCE」による多角的な学修成果の可視化

① 学修成果を可視化する仕組み

① 科目とDP寄与率の紐づけ

全科目で「5つの都市
大力」*の各項目に対
する寄与率を設定

② 成績評価に基づく DP達成度の算出

各科目の成績評価と
DP寄与率を突合し、
学修成果を数値化

DP達成度をレーダー
チャートで可視化



4年間の成長を描くレーダーチャート

* 5つの都市大力(DP)

1. 自立の力：主体的・自律的に学び、自己研鑽できる
2. 問いの力：「都市」に集約されるような複合的な問題に対して、グローバルかつ未来志向の視点で取り組むことができる
3. 価値創造の力：多種多様なボーダーを超えて知識や考え方を共有し、新たな価値を見出すことができる
4. 協働の力：公正・誠実に多様な人々と向き合い、柔軟に粘り強く協働することができる
5. 智と実践の力：人類文化と社会を理解し、基礎的及び専門的な知識とスキルを身に付け、それらを統合して持続可能な社会の発展に貢献することができる

学修履歴の記録と学修成果の証明

② ポートフォリオ機能

部活動やボランティア活動、インターンシップ、資格取得などの正課外活動についても学生自ら記録することが可能

学修成果の証明書(ディプロマ・サプリメント)

- 適正検査結果(ジェネリクススキル)を含む数値化できない強みも可視化
- 学生が課外活動を含むあらゆる活動実績を入力した後、担当教員との面談を通じて、原則、半期ごとに入力した内容に基づいたフィードバックや次年度の学びに関する学生への助言やフォローが行われるなど、学修支援においてもポートフォリオが機能
- 学修成果と正課外活動をまとめた証明書「ディプロマ・サプリメント」を発行でき、就職活動等で活用
- 学生が就職活動でディプロマ・サプリメントを活用しやすくするため、「採用人事担当者向けディプロマ・サプリメント説明書」を大学HPで公表
- 卒業時のみならず、在学中の各学年の途中段階でもディプロマ・サプリメントを発行可能
- 卒業後もポートフォリオへログインすることができる他卒業後もディプロマ・サプリメントを携帯でき、大学と卒業生が連携できるような仕組みを構築
- 令和8年度より学修成果を振り返る「アセスメントデイ」を年中行事として導入予定

※ディプロマ・サプリメント中の①②は、スライド左側の学修成果を可視化する仕組み・ポートフォリオ機能とリンクしている

東京都市大学
TOKYO CITY UNIVERSITY

発行日：2024年2月14日

DIPLOMA SUPPLEMENT ディプロマ・サプリメント

この学生はディプロマ・サプリメントの発行日において、学修成果として下記の能力を身につけていることを証明します。

東京都市大学
学長 野城 智也

(1) 学生基本情報

氏名 (学籍番号)	トシ ハナコ 都市 花子 (20E101001)
学部 学年 年次	理工学部 機械工学科 4年次

(2) 都市大力(成績評価)

学生成績とカリキュラムを基に、ディプロマポリシー到達度を算出し、学生の年度ごとの成長を可視化する。

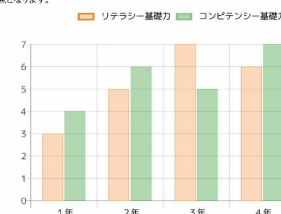
ディプロマ ポリシー項目	1年	2年	3年	4年
自立の力	6.1	11.0	14.6	15.3
問いの力	4.2	7.5	9.9	10.4
価値創造の力	2.8	5.0	6.7	7.4
協働の力	1.7	3.1	4.1	4.4
智と実践の力	4.0	7.6	10.1	10.8



(3) ジェネリクススキル(適性検査結果)

*スコアは1～7点となります。

項目	1年	2年	3年	4年
リテラシー 基礎力	3	5	7	6
コンピテンシー 基礎力	4	6	5	7



(4) アピール項目一覧

大學生生活全般にわたる学びとその学修成果から、ポートフォリオとして学生自身が記録した内容を以下に示します。

年度	学年	日付	活動区分	内容
2022		12022/12/13	課外活動	テスト勉強をしました。
2022		12023/1/14	資格取得	英検1級
2022		12023/1/19	資格取得	TOEIC500点
2023		12023/2/6	アピール項目(ボランティア・課外活動・アルバイトなど)	ボランティア活動に参加
2023		12023/2/8	学修支援スタッフ(TA・SA)	TAとして週2回授業
2023		12023/7/28	その他	テスト申請

■ 都市大力(成績評価)の詳細

都市大力(成績評価)の記録として、学生自身の履修科目別成績一覧を以下に示します。

年度	学年	科目名	単位	評価	自立の力	問いの力	価値創造の力	協働の力	智と実践の力
2023	4年	材料強度学	1	秀	20	20	20	20	20

ディプロマ・サプリメント

1. 取組の背景と目的

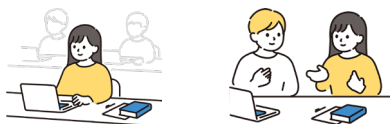
- 全学的な中期目標「学園ビジョンR2030立命館チャレンジ・デザイン」では、「**イノベーション・創発性人材**」の育成を一つの柱として掲げている
- 「イノベーション・創発性人材」には、学生が他者との違いを知ったうえで、自らの強みや価値を認識することが必要であり、そのためには**日常的な深い自己省察**が不可欠
- **学生の日常的な深い自己省察を支援する**ための手段として、立命館学園の「建学の精神」や「学生育成目標」など273の観点から抽出した「**8つのコンピテンシー(立ち直る力、自発性、チームワーク、自己効力感、理解力、マルチタスキング、共感力、変革力)**」を軸に自己省察を行う、**生成AIを用いた対話型自己省察アプリ**を導入
- 学生が生成AIとの対話を通じて、経験・学びを整理・深掘りし、日々の成長を実感できるようになることで、自らの強みや価値を見出せることを目指す

2. 立命館大学独自の対話型生成AIによる自己省察のプロセス

STEP 01

日常での気づきの整理

- ✓ 学生は正課・正課外における日常の経験を通じて、印象に残ったことや疑問に思ったことなどを認識し、自己省察のための土台を築く



STEP 02

大学独自の生成AIとの対話

- ✓ STEP 01での認識を基に、学生は大学独自の**生成AIと対話**する
- ✓ 生成AIは単なる答えの提示ではなく、**学生の暗黙知的な経験や学びを形式知として表出化するように機能し、多角的な問いかけを行う**

STEP 03

学びの深化

- ✓ 生成AIとの対話を通じて、自分一人では気づけなかった新たな視点を取り入れ、**自身の学びや成長をより深く省察、形式知化**する



STEP 04

学びと成長の可視化

- ✓ 生成AIとの対話を通じて深めた**学び・経験・形式知をエピソードとして言語化・可視化し、蓄積・共有**する
- ✓ **学園内の他の児童・生徒・学生・院生のエピソード*から学びを得る**

* <https://www.ritsumeai.ac.jp/competency/episode/>

※生成AIによる不適切な回答や、ハルシネーションのリスクを低減するための施策として、生成AIのガードレール機能を用いて学生の入力に不適切なワード等が含まれていないか確認し、含まれる場合には回答を返さない／会話を継続しない運用とする他、生成AIに不適切な方向への誘導や、禁止事項に抵触する出力を行わないことを規定している。学生が同意した場合に限り、生成AIとの対話を匿名化し、全学共有しているが、その工程に「センシティブなコンテンツ」を検出する工程を設け、検出された場合は、職員が内容を確認し対応している。また、学生が受講している授業のシラバス、授業で扱った内容、振り返りのポイントを予め「参照する資料」として登録することで、自分が実際に学んだ内容に基づいて、より現実に即した振り返り(自己省察)ができるようになっている

3. 学生からの反応

言語化・思考整理の支援

段階的な質問に答えることで**頭の中が整理され、経験や考えを言葉にしやすい**、自分では気づけない観点を知ることができる、などの高評価を得ている

自己理解の深まり

具体的に**自分がどう変わったか／成長したか可視化できた**、自分がどう考えたかを明確にすることで、より成長できた、などの高評価を得ている

4. 今後の展望

LMSや授業教材との連携

生成AIアプリとLMSや授業で用いられる教材と連携することにより、**学生一人ひとりの学修履歴や習熟度に応じて最適化されたフィードバック**を提供する

蓄積した形式知の活用

形式知として蓄積された学生の学びや経験を大学が分析し、**より質の高い、あるいはニーズの高い教育プログラム・学生支援施策を開発**する

アドバイジングへの活用

教職員による面談前に、学生と生成AIとの対話の機会を設け、**学生が潜在的な悩みを整理しておくことで、より効果的なアドバイジング**を行う

① 全学的な教学マネジメント体制の概要

全学的な体制確立に向けた取組開始の背景・きっかけ

- ・ 教学マネジメント指針の公表や、通信教育の指針見直しの提言等、社会情勢の変化を契機に全学的な教学マネジメントの体制確立に向けた取組が加速

【学修成果の把握・可視化、授業改善】

- ・ ディプロマ・ポリシー(以下、DP)と全科目の紐づけ
- ・ 正課教育にてマイクロレデンシャルを導入し、**多様な履修内容に応じた学修成果の可視化と質保証を実現**
- ・ 取得したマイクロレデンシャルに対して、デジタル証明として「オープンバッジ」を発行
- ・ 基礎から応用へ知識積み上げ式の体系的なカリキュラムを編成
- ・ 独自ポートフォリオを活用し、授業成績からDPの達成度をレーダーチャートで可視化
- ・ 学修成果や授業アンケート結果等を活用し、インストラクショナルデザイナーによる授業改善を実施

↑ 支援

↑ 支援

全学的な体制確立に向けた主な取組

【トップダウンで教育改革を推進する体制】

- ・ 内部質保証委員会：教育活動の継続的な改善・向上を図るための恒常的な組織
- ・ 学長が委員長を務め、全部署長が構成員として参画
- ・ 外部評価委員会：外部の有識者で構成される組織であり、大学の重点的取組に対して提言を行う
- ・ 大学は提言に対し、迅速に行動し報告

【手厚い学修支援体制】

- ・ **通信制教育で特有の孤立感を防ぐ**ため、機能別のサポート組織を設置し、学生を360度サポート
- ・ 特に、**24歳以下の若年層の学生については、進路関係の悩み等に対応**するため入学時から担任制の学修支援を実施するなど手厚く支援
- ・ 中途採用キャリア相談や、ソフトバンクグループ企業への中途採用選考のプロセスを一部優遇する「ソフトバンクグループ連携就職支援」を提供
- ・ ティーチングアシスタント(以下、TA)による学修支援：全科目にTAを配置

取り組む中で直面した
困難と乗り越え方



【困難】

通信制大学は多様な学生層への対応が不可欠であり、データドリブンな成績評価、卒業認定の信頼性確保が必要だが、自身が行っている教育をデータで分析されることへの心理的な抵抗を持つ教員もいた

↓

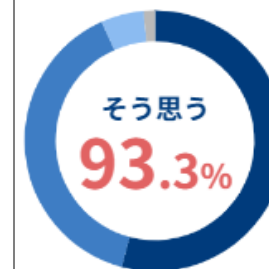
【乗り越え方】

データ活用の目的は、教員の評価ではなく教育改善であることを粘り強く提唱
10年以上の歳月をかけて受講データや授業アンケートの結果を教職員間で共有し合う文化が定着した

全学的な体制確立によって得られた成果

- ・ データに基づく**実効性の高い教育改善のサイクルを確立**
- ・ 体系的なカリキュラムにより、**卒業研究に進む学生の能力が向上**
- ・ 学修支援に係る取組が他大学の研修会でも取り上げられるなど、**社会から注目を集めている**
- ・ 学修成果の可視化や質保証の仕組みが評価され、**国内教育機関初の「オープンバッジ大賞」を受賞**
- ・ 学内調査より、オープンバッジ発行が学生の**学修意欲と自己肯定感の向上に寄与**することを確認
- ・ 履修継続率において、**90%という高い水準を維持**
- ・ 2024年3月卒業の24歳以下の**就職率は95.8%という高い水準を実現**
- ・ 卒業生の継続学修にも効果が出ており、マイクロレデンシャル導入後の**科目等履修生数は4倍に増加**

学び続ける意識が高まった



- ♥ とてもそう思う 54.1%
- ♥ 少しそう思う 39.2%
- ♥ そう思わない
- ♥ わからない

大学からの一言メッセージ

本学は、日本におけるマイクロレデンシャルの普及と、社会的地位の向上を牽引するとともに、学内外の多様な指標を用いたエビデンスに基づく教育の質保証の実現を目指します。本学に受け継がれる教職協働の文化を礎に、学生の研鑽が社会で正当に評価され、学生の可能性を最大限に引き出す基盤を創り上げてまいります。

② マイクロレデンシャルやデータを活用したエビデンスベースの学修成果・学修支援

マイクロレデンシャルの導入・データに基づく学修成果の可視化

1. マイクロレデンシャルの導入

- 正課教育にて学位プログラムを維持しつつ開講科目をグループ化
- グループ内の科目を全て合格することにより、その学修成果をマイクロレデンシャルとして認定し、出口における質を保証
- 取得したマイクロレデンシャルに対し、デジタル証明として「オープンバッジ」*を発行し、学修成果を企業等へアピールが可能

* (財)オープンバッジ・ネットワークの基盤で発行。本学は取得難易度に応じた「ブロンズ」「シルバー」「ゴールド」「プラチナ」の4段階のレベル分けと内容更新に伴うバージョン管理を実施

2. 授業科目・教育課程の編成

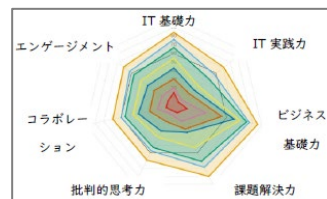
- 基礎から応用へ知識積み上げ式の体系的なカリキュラムを編成し、分野別・階層別の学修歴をマイクロレデンシャルとして定義したオープンバッジを整備
- カリキュラム全体像と科目の履修順序を示す「カリキュラムマップ」では、科目の関連性や履修条件を明示



知識積み上げ式のカリキュラムに対応したマイクロレデンシャル

3. 独自eポートフォリオなどの活用

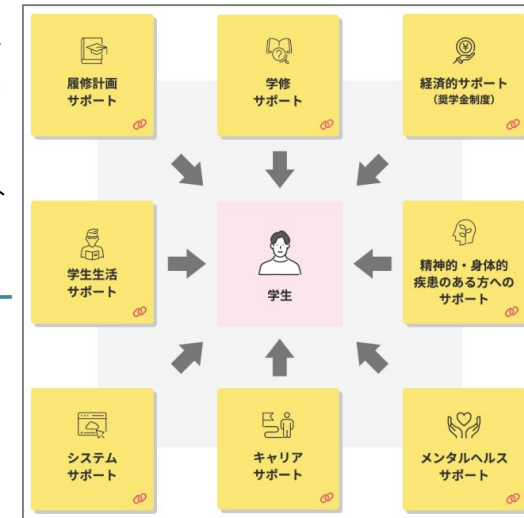
- 学生ごとに学修成果(DP達成度)や外部アセスメントテストの結果等をポートフォリオ上でレーダーチャート化し学修成果を可視化



手厚い学修支援

4つの専門組織による360度サポート

- 通信制教育で特有の孤立感を防ぐため、機能別に4つの専門組織「授業サポートセンター」、「システムサポートセンター」、「学生サポートセンター」、「キャリアサポートセンター」を設置
- 授業サポートセンターにはインストラクターやラーニングアドバイザーを配置し、学修内容から履修計画まで支援
- 学生からの問い合わせへの回答は、原則24時間以内に行うことを徹底
- 学生サポートセンターには公認心理師や臨床心理士の専門資格を有する職員を配置し、メンタル面での学生支援を実施



担任制の導入

- 近年増加傾向にある、24歳以下の若年層の学生に対しては、進路関係の悩み等に対応するため、「担任制のコーチ」を配置し、学修から生活、キャリアまでワンストップで伴走支援を実施
- 定期的な連絡に加え、個別面談も必須化するなど、自律的な学修能力を育成するための学修支援を徹底

学修ログを活用したTAによる学修支援

- 全科目にTAを配置し、学生の学修上でのつまずきを把握
- TAは、担当科目での学生の受講進捗状況やつまずきを会議で共有し、どのように学修支援を行うべきかワークショップ形式で議論を継続
- 受講履歴等を分析し、学修につまずいている学生へのフォローアップも徹底